

競馬がますます  
楽しくなる

続 ファンにやさしい

# 馬学講座

第 56 回

## 不治の病〰️屈腱炎とは？ ③

講師

笠嶋快周あしのりさん  
JRA競走馬総合研究所  
臨床医学研究室 室長



案内人：辻谷秋人  
text by Akihito Tsujiya

治らないわけではない屈腱炎が  
不治の病と呼ばれるのは何故？

馬が長期間継続して走ることによって、浅屈腱に溜まった弾性エネルギーが熱に変換され、その熱によって腱線維が変性して弱くなり、そこに大きな力学的負荷がかかることで腱線維の一部が切れてしまう。というのが、屈腱炎発症のメカニズムだった。

これを踏まえての今回のテーマは、「なぜ屈腱炎は不治の病といわれるのか」である。不治の病という和普通は「決して治らない病気」のことをいうが、屈腱炎の場合はやや事情が異なる。「決して治らない」わけではないのだ。8、9月号に引き続き、今回もJRA競走馬総合研究所の笠嶋快周室長にお話を伺っていく。「切れた腱線維は時間の経過で新しい組織と置き換わるのですが、屈腱炎発症前と同じ状態には戻らないのです。腱線維は本来なら平行に規則正しく並ぶのですが、新しく作られる腱線維はまっすぐ並ばず、強度も弱いのです」この元の形とは違う組織を癒痕組織やどんこという。屈腱炎と同様に競走馬の脚によく

起る怪我に骨折がある。骨折では折れた部分がくっつくときには新しい骨組織が作られ、完治後の強度は骨折前と変わらないほどまで回復する。しかし屈腱の場合は、腱組織ではなく癒痕組織が作られるため、元の組織より弱いものになってしまうのだ。

また、この癒痕組織は伸び縮みも正常な腱組織ほどにはできないのだという。そもそも屈腱炎を発症した部位は、もともと弾性エネルギーが溜まるほど伸び縮みを求められる場所だ。だから熱を持ち、腱線維の変性が起きたのである。そんなところが伸び縮みのできない組織に置き換えられ、強度もさらに弱くなった状態で強い運動をしてしまったらどうなるかを推測するのはまったく難しくない。同じところがまた切れてしまう、再発である。

つまり屈腱炎とは「決して治らない」というわけではないが、かといって完全に元どおりになるわけではなく、そのため再発の可能性がとて高いものなのだ。ただ、これでは表現としてスマートではないし、「不治の病」といつてしまっても、まあ間違いではない、といったところだろう。

馬の運動量を制限し、適度な  
リハビリをすることが重要

さて、そんな屈腱炎の治療だが、しばらく前に注目された治療法に幹細胞移植がある。これは腱細胞に分化する幹細胞を患部に移植して、損傷した腱線維の修復を促すというものだ。

「幹細胞自体の生存率は高くないのですが、幹細胞が周りの細胞に『壊れた腱線維を治しなさい』というシグナルを送る、これが重要なのです」

ただ、私たちは幹細胞などと聞くと、それだけでどんな病気も治ってしまうような過大な期待を抱いてしまうのだが、実際はそれほど簡単なものではないようだ。癒痕組織の形成を抑制して、できるだけ正常な状態に近くするのにもっとも有効なのは、やはり適度な運動ということになる。リハビリである。

「ただ、屈腱炎が面倒なのは、炎症が治まってしまえば痛みがないことです。痛みがないから、馬は走り回ってしまいます。これではリハビリの運動量としては多すぎるのです。ですから、屈腱炎のリハビリで重要なのは、いかに馬の運動を制限

して、適度な運動量に抑えるかということになります」

リハビリというとな必要運動量を確保するためのものというイメージがあるが、屈腱炎の場合はむしろ逆なのだ。これも屈腱炎治療が難しい理由のひとつなのである。

